

■ 書 評



-シリーズ生命倫理学- 第9巻 精神科医療

中谷陽二, 岡田幸之責任編集
丸善出版
2013年5月 256頁
本体価格 5,800円+税

職務に関する倫理については古くは紀元前18世紀のハムラビ法典までさかのぼり、今日にそのまま当てはまることはできないものの医師など専門職の責任が記載されている。さらに紀元前4世紀以降とされるヒポクラテスの誓いにおいて、守秘義務の規定など医療倫理の基本的な考え方が示され、医学教育をはじめとする今日の医療者のあり方の基本となっている。

今日、生命科学・医科学の臨床や研究において倫理的問題が論じられることが多くなり、利益相反の側面を含め、社会に向けてより透明で説明可能な医療や研究を行うための倫理面への配慮が今まで以上に求められる時代になった。その中であって精神科医療の対象は生物・心理・社会の多次元にわたる人間存在であるため倫理に関わる問題も複雑である。

本書は「シリーズ生命倫理学 全20巻」における第9巻として精神科医療を対象に生命倫理を論じている。全体は13章より構成され、その章立ては歴史(第1章)、法律(第2章)、研究倫理(第3章)、守秘義務(第4章)、治療(ロボットミーなど精神外科)(第5章)、薬物療法と電気痙攣療法(第6章)、地域精神医療(第7章)、心理療法(第8章)、司法精神医学(第9章)、性(第10章)、認知症(第11章)、自殺(第12章)、嗜癖と依存(第13章)となっている。本書では精神科医療が直面する多様な倫理的課題について、その生物・心理・社会的側面に関して、総論から各論への包括した議論がなされている。

わが国の精神科医療や精神医学研究の質的な向上のためには、土台となる倫理面の充実が必要不可欠である。今日の時代の要請としても精神医学・精神科医療に関する倫理的な諸問題を包括的・総括的に取り上

げた本書の意義は小さくはない。本書の緒言に述べられているように「精神医学分野において伝統的に倫理問題への関心は薄かった」ため、「関心の喚起」を図る必要があるとしている。ここで、評者には幾つかの新たな視点が印象に残った。精神科医療における倫理的な課題として、器質的な病変がないにもかかわらずロボットミーなど外科的な治療が行われた過去の精神科医療の歴史への検証であるが、今日の精神科治療においても脳・神経科学の進歩がもたらす新たな治療について、(侵襲の程度は異なるが)倫理的な考慮が必要である。その際の同意に関して(従来)の「医療モデル」ではなく、「人権モデル」の提案がなされており、この考え方は治療的な配慮を行う上で参考になると思われた。また、精神科医療の対象者が時には法律に触れる他害行為を行ったり、自傷行為を行う場合があるため、守秘義務に関する取り扱いには細心の注意が求められるが、その点にもEBM (evidence based medicine) による実証と調和するという視点が論じられている点や施設中心の入院治療から地域への移行が進む状況など精神医学を取り巻く新たな流れの中での倫理的な対応においても新たな多様な価値観の受容が必要であるとする点などが印象に残った。

緒言の最後に「日本では精神科医療の法的整備は図られてきたが、学会組織による倫理綱領やガイドライン作りに向けた活動、精神医学教育・研修への取り組みは立ち遅れている」とある。精神神経学会では1984年に発足した「研究と人権問題委員会」での議論を踏まえて、「臨床研究における倫理綱領」を作成している(精神経誌, 99(7); 525-531, 1997)。さらに精神神経学会は最近の臨床疫学、脳科学、ゲノム医学など研究手技や技術の進歩に対応した補遺(2010年7月17日理事会承認案)も提案している。これらは精神医学の臨床研究における必要な倫理的骨格を提示しているが、その存在に改めて関心を向けるとともに、わが国の精神科臨床や研究における倫理についての教育や研修の機会を持つことを日本精神神経学会としても求められている。

(谷井久志)